慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	土佐風俗と傳説(寺石正路編, 郷土研究社發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.3 (1925. 8) ,p.149(461)- 150(462)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250800-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教、風俗習慣、史實、傳說、社會、人類、考古、其他あらゆる方面に關聯した研究の集大成である。該博なる知識と鋭敏なる觀察とを表はすに、詩の如く麗はしき文章を以て綴られたのであるから、何人も讀了せざれば卷を覆ふことを惜むであらう。

全篇に亙つて語源的說明が可なり多く散見するが、其二三を擧げて見るならば、津久見島、櫛間院、大隅、大泊のヨク、波照間、蒲葵、カライモ、猪、豚等に關するもので、言語學者の傾聽すべきものが澤山ある。氣の毒な話としては水不自由な保土の島の御大師樣水、「南の島の清水」、「海行かば」の漂流談、「三太郎坂」等がある。いれずみの南北、今何時ですか、豆腐の話、久高の屁、赤蜂鬼虎、二色人、南波照間、阿遲麻佐の島等は吾々の最も愛讀して措かなかつたものである。移川教授は東京朝日新聞に於て「柳田氏にとつては其琉球に對する深い造詣の中のただ一片のひらめきに過ぎないのであらうけれども、吾々が讀めば色々の面白い鄕土的觀察記錄に充ちてゐて、氏の研究の深さの程がうかゞはれるのである。とりわけ其行文の例によつて流麗なる、其描寫の詩の如く繪の如き美しさ、南島の情趣の懷しさを坐ろによび起さずにはおかせない。與那國の女、南の島の清水の如き、寧ろ哀切なる文學と呼びたい程だ。」といはれてゐる。まことに著者の島人に對する同情は非常なるものである。

吾々が八重山土俗展覽會を國學院大學で開いた大正九年の秋頃迄は、琉球研究はまだ微々として振はなかつた。翌十年正月柳田先生が歸京せられると、國學院大學鄕土會を初めとして、本塾、三越流行會、其他多くの新聞雜誌等に精細なる發表があり、一方南島談話會及び爐邊叢書に於て、舌と筆に據り、益々琉球研究の必要を唱道せられた。其結果折口、田邊、ネフスキー、三上、佐藤等の諸氏の熱心なる研究家が現はれた。僅か數年の間に琉球研究が斯くの如く盛大になつたことは一に柳田先生のお蔭といはればならぬ。

琉球研究は單に琉球研究を以て目的とするものでなく、わが日本文化の源流に溯つて、上代人の生活の跡を窺ひ知るにあるのである。それは琉球が我が古代社會の面影を最もよく髣髴せしめ、あだかも其研究資料を無限に寶藏する文庫の如き觀を呈するからである。此意味に於て「海南小記」は實に學界に對する一大プレゼントであると云はなければならぬ。（宮良當壯）

土佐風俗と傳說

（寺石正路編　鄕土研究社發行）

爐邊叢書の一册にして、土佐の風俗と傳說とのうち土俗學上興味のある主なるものを種々の記錄と古老の物語りし口碑とからとれるものであつて、風俗には年中行事、婚姻葬式、農家風俗、神佛祭事、異風奇俗についてのべてゐるが、特に興味を感ずるのは大古に行はれた歌垣に類する風習が今なほ殘存してゐることである。しかしかゝる風習もまた他の多くの風習と同じやうにやがては文明といふ波濤ののむところとなつて滅びゆくであらう。傳說においては天狗、怪火、猿猴（河童）、幽靈、猫怪、古狸、蛇神、怪

獸などの話、或は民間信仰に關係ある流行神や犬神、或は長者物語等がある。風俗でも傳說でもその地方の民衆の生活の反映であり、民衆を理解する最も大切な要素である。けれども時代のすゝむとともにこれらは全く消滅したり、或は變化する。それ故この災禍を免れるためにはこれを記錄にとどめて保存せねばならぬのであつて、本書のごとき小册子とは言へ土俗研究には非常に貴重なる書と言はねばならぬ。

球球人名考（東恩納寬惇著　鄕土研究社發行）

本書もまた爐邊叢書の一册であつて、琉球における古文獻に見れたる人名をいかによむべきか、また後世のといかなる關係を有するかを研究せるものである。まづ一般氏名、卽ち姓及氏、家名、名乘、唐名、童名の研究より始めて童名の接頭美稱と接尾美稱としての附加語の種類をあげ、その性質を說明し、さうして童名の接頭語及び接尾語の附加具合によつて貴族、士族、平民の三階級を表示することをのべ、ついで各種の童名、組踊中の童名、古書に見れたる人名、『おもろ』及び傳說に見れたる人名をあげて說明し、また種々の王の神號をあげてその意味をさぐり、それが光耀の意を表はすもの、靈威崇高を表はすもの、偉大英雄を表はすもの主權を表はすもの、浮揚秀勝を表はすものであること、換言すれば稜威盛なる日神の御裔と云ふ抽象的絕對的讃意の外に、仁とか義とか云ふやうな批判的相對的思想を表現してゐないことをのべて、これによつて王權に對する觀念をみることができるとなし更に命名に關する慣行を說き、また貴族、士族、平民の階級制度と位階、並ひにその階級及び位階を表示する冠及び簪の起原や種類をのべ、最後に組踊中に見れたる位階組織を說いてゐる。かくのごとく各方面に亘つての研究であつて、ひろく古記錄類を引用し、いたるところ語源的解釋をほどこしてその原意を明かにしてゐる。琉球研究者に對してその蒙を啓くところは少くないであらう。

シマの話（佐喜眞興英著　鄕土研究社發行）

本書もまた爐邊叢書の一册であつて、沖繩島中部地方の新城（アラグスク）の島を中心とした土俗の研究である。本書に於けるシマは島の意味ではなくして、ロシアのミイルにすこぶる似た村落共產體の意味するところのもので、經濟上に於いても社會組織の上に於いても一の單位をなし、そこに發生したるシマ生活はそれぞれ特異なものであつた。本書に於いてはまづ『村落共產體としてのシマ』に於いてこの特異なシマの行政、社會的羈絆、結婚制度、自治警察制度、租稅、祭禮、娛樂等に關する說明をなし、以下島人の私有財產的法律關係、島人の家々、島人の被服、島人の飲食物、島人の年中行事、出生、性、病、死、死後、旅、島人の言葉遣及呼稱、トキ・ユタ及マジナイ、雜の項目の下にそれぞれの土俗學的研究をなしてゐるが、殊に注意すべきは、他でほとんど